聖書と説教　　2024 年 6 月 23 日（日）聖霊降臨後第 5 主日

新約聖書 マルコによる福音書 4 章 35 節―41 節（新共同訳）

35 その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言わ
れた。36 そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出
した。ほかの舟も一緒であった。37 激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、
水浸しになるほどであった。38 しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておら
れた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわ
ないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。
静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40 イエスは言
われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41 弟子たちは非常に恐れて、
「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互
いに言った。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「嵐の中」

ドイツ人の牧師である、ボンヘッファーという人はこう述べています。

「まさに礼拝の時の聖書朗読において、聖書の中の歴史書は、わたしたちにとって全く新しい書物となるのである。わたしたちはそこで、かつてわたしたちの救いのために起こった出来事にあずかることができ、自分自身を忘れ、自分を捨てて、共に紅海を渡り、荒野を通って、ヨルダン川を渡って約束の地に入る」（『共に生きる生活 改訳新版』より）

さて、本日の福音書は、湖で嵐を静めるイエスの奇跡が記された箇所です。「その日の夕方になって」と、時を表す言葉から始まります。

「その日」とは、イエスがガリラヤ湖で舟の上から、岸辺に集まるおびただしい群衆に向かって、「種を蒔く人のたとえ」などを用いて、神の国の神秘について語った一日のことでした。

それらのことを終えた夕方、イエスは弟子たちに「向こう岸に渡ろう」と言ったのです。それを聞いた弟子たちは群衆を後に残し、イエスが乗る舟を漕ぎ出して対岸に向かいました。

ガリラヤ湖の向こう岸にあるのはデカポリス地方で、ユダヤ人から見れば異邦の地、すなわち よその人々が住む地です。そこに行くとは、単に地理的に向こう側に行くというだけではなく、今いる場所から向こう側、違う場所、異なる世界へ踏み出そうということでしょう。

すると、激しい突風が起こりました。ガリラヤ湖は、海面下 200 メートルにある湖で気象の変化が激しく、しばしば突風に襲われることもあったようです。弟子のペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネは、もともとはこの湖で漁をする漁師だったので、そのような気候条件はよく知っていたでしょう。

しかし、そんなベテランの漁師ですらもうろたえ、眠っているイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言うほどの嵐が起こります。

そんな中、イエスは舟の後端である艫（とも）の方で、枕をして眠っていました。

「おぼれても」を直訳すると、「滅びても」となります。「先生、わたしたちが滅びてもかまわないのですか」ということです。弟子たちのこの言葉からは、「眠っていないでなんとかしてください」というイエスへの懇願が感じられます。そこには、イエスへの苛立ちや非難する気持ちもあったかもしれません。

するとイエスは、起き上がって風を叱り、湖に「黙れ。静まれ」と言います。途端に風はやみ、すっかり凪（なぎ）になりました。凪（なぎ）とは、風が止み波が穏やかになることです。風がなく穏やかな状態を表すこの言葉は、心が平穏である様子、世の中が安定している様子を表す際にも使われます。

イエスの「風を叱り」の「叱る」という表現に注目してみてください。この「叱る」（エピティマオー）は、古いギリシア語訳である旧約聖書『七十人訳（しちじゅうにんやく）』で、人間を脅かす様々な力に対する神の叱責の言葉として用いられています。たとえば詩編 106 編 9 節「葦の海は主に叱咤［しった］されて干上がり」などです（七十人訳聖書では詩編 105 編 9 節）。

旧約聖書では、神が嵐や海、風に対して力を奮っています。言い換えれば、イエスはここで「神御自身」のように振る舞っているのです。イエスは、神に祈って嵐を静めてもらうのではなく、自分自身の言葉によって、嵐を静めます。

イエスが嵐を静めたこの奇蹟は、「悪霊ばらい」や「癒し」などのそれまでのイエスの奇蹟よりも、さらに規模が大きいことが際立ちます。

当時の人々の間では「悪霊ばらい」や「癒し」は、特別な力があれば、人間であっても行うことができるものである、と理解されていました。また、実際に悪霊ばらいや癒しを仕事とする人々も存在していました。しかし、嵐を静めるというような大規模な奇蹟は、ただ神だけがそれをなし得ると考えられていました。

「弟子たちは非常に恐れて」とあるように、弟子たちにイエスに対する「畏怖」の心が生じました。彼らはこの驚くべき奇蹟を目撃して、非常に恐れますが、この「恐れ」は、彼らが嵐の危険の中で恐れた時の恐れとは、違う次元の恐れです。それは、神的存在の前に立った時に感じる「畏怖心」です。

イエスの弟子になり、いつもイエスと行動を共にして、イエスのことを知っていたつもりだった彼らが、「いったい、この方はどなたなのだろう」と互いに言います。彼らはイエスを「先生」と呼んでいました。しかし、嵐に向かって「黙れ、静まれ」と言うだけで嵐を静めたイエスを見て、イエスが「先生」という言葉ではとうてい言い表せない方であると悟ります。

私たちにも、自分がよく知っているつもりでいた近しい人のことを、実は何も理解していなく、自分が把握していた以上の、その人の偉大さ、崇高さに気づく時があるかもしれません。

自分の近しい人や隣人を、自分の尺度で見るのではなく、その人の中にある偉大さ、崇高さに目を向けて、それを見出し続けることが大切なのだと思います。

それは、自分自身に対しても言えることです。あなた自身の中にある偉大さ、崇高さ、あなたの内側にいるイエス・キリストを見つめ続けてください。

マタイ福音書 18 章 19 節に、こう記されています。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」。

この言葉は、一人で祈るよりも、共に祈ることがさらに大きな力となることを、私たちに約束しています。

普段の生活の中で、人と共に祈る機会はなかなかないかもしれませんが、教会で、私たちが心を合わせて共に祈ることができるのは幸いなことです。

また私たちは、同じ空間にいる時だけではなく、物理的には離れた場所にいる時も、共に祈ることができるのです。

そして、一見するとひとりで祈っている時でも、いつもキリストがあなたと一緒に祈ってくださっていることを覚えていてください。

主イエス・キリストは、いつもあなたと共にいます。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 ヨブ記 38 章 1 節―11 節（新共同訳）

[1]主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。[2]これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。[3]男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。

[4]わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ。[5]誰がその広がりを定めたかを知っているのか。誰がその上に測り縄を張ったのか。[6] 基の柱はどこに沈められたのか。誰が隅の親石を置いたのか。[7]そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い／神の子らは皆、喜びの声をあげた。[8]海は二つの扉を押し開いてほとばしり／母の胎から溢れ出た。[9]わたしは密雲をその着物とし／濃霧をその産着としてまとわせた。[10]しかし、わたしはそれに限界を定め／二つの扉にかんぬきを付け[11]「ここまでは来てもよいが越えてはならない。高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 6 章 1 節―13 節（新共同訳）

[1] わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。[2]なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。[3]わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、[4]あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、[5]鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、[6]純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、[7]真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、[8]栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、[9]人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、[10]悲しんでいるようで、常に喜び、貧しいようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

[11]コリントの人たち、わたしたちはあなたがたに率直に語り、心を広く開きました。[12]わたしたちはあなたがたを広い心で受け入れていますが、あなたがたは自分で心を狭くしています。[13] 子供たちに語るようにわたしは言いますが、あなたがたも同じように心を広くしてください。

教会讃美歌　131 番「聖なる聖なる」1,2,4 節 298 番「心まよいゆくをやめて」1,2,3 節、290 番「ガリラヤの風」1,2,3 節、258 番「主イェスよ来たりて」1,2,3 節、165 番「いともとうとき」1,2,4 節。